

「ハーフ」は偏見・差別経験をいかに語りうるのか

——多人種的背景を持つ人々の相互行為における不服連鎖——

有賀 ゆうアニス

多人種的背景を持つ人々とその経験への注目が高まっている一方、彼らが人種的経験を語るという実践自体がいかに達成されているのかについては十分に明らかにされていない。この課題に取り組むべく、当事者が自らの人種主義的経験を語っている相互行為場面を会話分析の視点から分析した。分析により次の知見を得た。人種主義的経験の語り手は、非当事者の聞き手との連携的関係の構築・維持、その関係に対する潜在的脅威としての不服の制御という課題に指向している。その指向のもと、(1) ユーモアや笑い、(2) 評価の一般化可能性の統制といった方法を通じて、聞き手との連携を管理している。以上の知見は、人種主義経験を語るという行為が局所的な相互行為秩序に連動していること、人種主義の社会学的探究の方途として会話分析が有望であることを示唆している。

1 はじめに

20世紀末以降、グローバル化を背景として日本を含む移民受け入れ諸国では複数の人種的・民族的背景を持つ人々 *multiracial people* (以下、MR) の公共的存在感が高まりつつある。たとえばアメリカ合衆国では1980年代から当事者による運動の発展を受けて、2000年から国勢調査で回答者が複数の人種を選択することが可能になった。以来その割合・数は増加を続け、全人口に占める比率は2010年には2.9%(約9000,000人)、2020年には10.2%(約33,800,000人)に達した(Jones et al. 2021)。また日本の移民的背景を持つ人々の人口動態について推計した是川夕によれば、片親を外国人とする「国際児」—いわゆる「ハーフ」「ダブル」「ミックス」—の割合は2015年の0.6%(約804,000人)から2040年の1.8%(約2,030,000人)を経て2065年には3.8%(約3,485,000人)に至ると推測される(是川2018)。

このようにMRや彼らに適用されるカテゴリーの社会的存在感が増大していく今日、彼らの経験やカテゴリーに照準した研究はますます重要な社会学的課題になりつつある。日本でも2010年代以降、MRに焦点を当てた研究が継続的に発展してきている。MRをめぐる言説が歴史的にどのように推移してきたのか(下地2018)、メディア文化において彼らがいかに表象されているのか(岩淵編2014)、日常生活の中で人種的アイデンティティに結びつきたいかなる差別を経験しているのか(下地2018)、自らの人種的アイデンティティをどのように認識しているのか(Osanami 2018)、特定の国・民族のルーツが本人の生活史にとってどのような意味を持っているのか(李2008; 野入2022)といった論題が探究されてきた。

本稿ではこの課題に取り組むべく、次のように議論を行う。まず第2章では、日本におけるMRに関する先行研究のレビューを行い、先行研究の知見・限界と本研究の課題を明確にする。次に第3章では、以上の研究課題を展開するために有用な分析アプローチとして会話分析を位置づけ、同アプローチに基づく本稿の研究戦略を記述する。さらに第4章では、この戦略に基づき、MR当事者が自らの人種主義的経験についての不服を語っている相互行為

の諸断片を分析する。分析をつうじて、人種主義的経験の語り手が相互行為上の実践的課題として非 MR の聞き手との連携的関係の構築・維持に指向していること、人種主義的経験の語り手はこうした連携に対する潜在的脅威としての不服を管理するために、(1) 笑い・ユーモア、および (2) 一般化可能性の統制という 2 つの手続きを使用していることを例証する。以上の知見をもとに第 5 章では、本稿の含意と今後の研究の展望を述べる。

2 先行研究

日本における MR 研究で特に注意を集めてきたのが、人種主義とアイデンティティにかかわる当事者の経験という論題である。たとえば、下地ローレンス吉孝 (2018) は、インタビュー調査を通じて様々な世代の MR の日常的経験を描き出している。下地は学校や職場といった様々な制度空間のもとで、当事者が人種差別・偏見を経験している様子を強調している。また長南さや佳らも、インタビュー調査に基づき、どのように MR が自己の人種的アイデンティティを経験し認識しているのかを分析している (Osanami 2018; Osanami and Sato 2021)。日本人／外国人という二項対立的なカテゴリーを超えた方法で自己の経験を理解していること、自己アイデンティティと他人によって帰属されるアイデンティティの間のギャップを日常的に経験していることを長南らは強調する。さらに公共的言説において MR がどのように表象され MR に対する認識のあり方がどのように形づくられてきたのかを検討した研究や (岩淵編 2014; 岡村 2016)、「アメラジアン」(野入 2022) や在日コリアンの「ダブル」(倉石 2007; 李 2008) といった MR の中の特定の集団における人種的・民族的経験に照準した研究も進展しつつある。

以上の研究路線は更なる展開が望まれる一方、先行研究は、MR の経験の解明という課題に指向するあまり、MR が自らの経験を語るという行為自体がどのように遂行されているのか、という点にはさほど注意を向けてこなかった。Sacks (1992) が示唆するように、一般に当事者の経験は本人により何らかの形で語られることで初めて他人によって接近可能になる。そうである以上、単に当事者がどのような経験をしているかだけでなく、そもそも人が自らの経験を語ることはいかにして可能になっているのだろうかという問いが成り立つだろう。実際、人種的アイデンティティに指向した相互行為ではマイノリティの語り手が緊張の度合いを最小化するために、自らの否定的な経験の語りを抑制する傾向がレイシズム研究では報告されてきた (Bobo and Fox 2003: 322)。人種主義的経験の語り手が相互行為上でどのような実践的課題に指向しているのか、どのように聞き手との関係を管理・調整しようとしているのかを分析することで、人種 (主義) をめぐる MR 当事者の経験という、先行研究が取り組んできた研究課題をさらに発展させることができるだろう。

こうした点で例外的なのがケイン樹里安 (2017; 2019) の研究である。ケインによれば、彼が扱う「ハーフ」当事者コミュニティでは MR として直面した・しそうな状況を「ネタ」として披露し合う「ハーフあるある」という形式で経験の語りと相互行為が展開されている。こうした形式は当事者の経験している窮状を「しのげるもの」に転化させる一方、そうした話法に習熟できない当事者は「ネクラ」としてコミュニティから排除される、とケインは論じ

る。MR の人種的経験を語るという営みが当事者コミュニティという場の規範や方法によっていかに組織・規制されているかを明らかにした点で重要な知見である。

他方、MR が自らの経験を語る行為自体がいかに構造化されているのかという研究議題を更に前進させるには、以下の課題にも取り組む必要がある。第1に、より多様な相互行為場面に照準することだ。前述のように人種的経験の語りが相互行為の局所的文脈に依存するならば、MR の話し手が当事者のみならず非MR の聞き手へと自らの経験を語る時、どのような規範や方法が運用されているのかを問うことは適切であろう。第2に、相互行為の展開をより詳細に観察することだ。ケインは主に参与観察とインタビューの併用で上記の現象に接近している。しかし、人種(主義)をめぐる相互行為の経過はそのつどの極めて偶発的かつ微細な表現や方法によって組織されており、そうした現象にはこうした手法だけでは十分に記録しきれない面が多い。ケインが照準している「ハーフあるある」のような活動も、それが相互行為のどのような経過の中で、どのような方法を通じて生起・展開しているのかをより詳細に観察することで、新たな経験的知見が得られよう。

本稿ではこうした課題に取り組むために会話分析のアプローチを採用するが(第3章)、実際会話分析では、多様な場面における相互行為の経過・方法の詳細な観察を通じて人種差別的な言動や人種差別経験の語りがいかに遂行されているのかについて豊富な経験的分析が展開されてきた(Whitehead 2015; Stokoe 2015; Rawls and Duck 2020; Robles 2015; Xie et al. 2021)。以上の2点に定位した会話分析的探究を通じ、MR の人種をめぐる経験の語りがいかに構造化されているのかについての知見をさらに深めること。こうした作業は、MR の経験の解明という課題を既往研究とは異なる観点から前進させるだけでなく、これまで日本語圏においてほとんど発展してこなかった人種的マイノリティの実践を対象とする会話分析的研究の発展に貢献するという点で、一定の意義を有するはずだ。

3 方法とデータ

人種主義的経験を語るという行為を抽象的な水準におくなら、誰かに帰責しうるような自らの経験を語る営み、すなわち不服 complaint の一種として捉えることができよう(Heinemann and Traverso 2009)。不服という行為がいかなる相互行為上の構造や資源によって組織されているのかという論点については、社会学の中でも、会話分析の研究プログラムにおいて豊富な経験的研究が蓄積されてきた。

会話分析は、会話をはじめとする個々の相互行為上での様々な社会的行為・関係が、そのつどの場面で用いられる常識的方法を通じていかに理解可能に産出されているのかを探究する分野である。そうした方法として特に強調されてきたのが連鎖組織 sequence organization である。相互行為は、参与者たちの無秩序で勝手に発話が集積することによって成立するものではない。むしろ、参与者がその都度の実践的課題への指向のもとで発する様々な発話が連鎖的に生起していくことによって、相互行為は組織されている。それぞれの発話は先行するおよび／あるいは後続の発話との規範的関連性の中で指向され、こうした指向のもとで参与者たちは自らの行為を理解可能な仕方でもって産出し、相手の行為を理解している。会話分析の

目的は、こうした連鎖組織の視点から、相互行為上の様々な発話・行為について「なぜ、それが、今」生じているのかを解明することである (Heritage 1984; Schegloff 2007)。

連鎖組織の観点から重要なのは、不服が隣接対の一種であり、複雑な連携の規範によって組織されている点だ。隣接対とは、(1) 第一成分 (first pair part) と第二成分 (second pair part) の2つの部分からなり、(2) それぞれの部分異なる話し手によって発せられ、(3) 隣り合った位置に置かれ、(4) 一方が先に置かれ、その後にもう一方が置かれるという順序の制約があり、(5) 前者が遂行される時後者を遂行することが有意味になる、という特徴を備えた行為のペアをさす (Schegloff 2007: 13-14)。「質問-応答」「依頼-受け入れ/拒否」などがその典型である。隣接対は連鎖組織の基礎単位であるが、その第二成分の候補はすべてが対称的に選択可能であるわけではない。相互行為者たちは一般に相互の連携 affiliation—一方の参与者の見解や立場への支持を表示するような他方の参与者の行為やそれに基づく関係—を管理するという実践的課題に指向している (Heritage 1984: 265f)。この規範のもと、隣接対第二成分の候補は、連携を促すという意味で規範的に望ましく、相互行為上で自然かつ率直に表現される優先的 preferred 行為と、逆に連携を阻害するという意味で規範的に望ましくなく、言いよどみや遅延や理由説明などを伴う非優先的 dispreferred 行為とにしばしば分かれる (Heritage 1984: 267f; Pomerantz 1984)¹。

不服は第一成分として様々な行為と隣接対を構成しうるが、それらのいずれが連携的・優先的であるかはその都度の状況に依存するという意味で局所的・偶発的である。たとえば不服の対象が不服の聞き手と一致する「直接不服」の場合、それは相手への非難を含蓄するという意味で非優先的かつ非連携的 disaffiliative でありうるし、不服の聞き手側の否定的反応として否認・弁解・正当化などの機会が与えられうる (Dersley and Wootton 2000; Drew 1998)。他方、逆に、不服の対象が聞き手ではない第三者に向けられる「間接不服」の場合、不服の聞き手側の肯定的反応—第三者への帰責を促進する反応—として共感や加勢や同意などが喚起され、当座の参与者たちの連携を促進するかもしれない (Haakana 2007; Traverso 2009)。

不服の話し手や聞き手がこうした偶発的・局所的な道徳的含蓄をいかに指向し、どう相互行為上の連携との関係を管理しているのかについて、会話分析的研究は豊富な知見を蓄積してきた。本稿はこうした研究路線に沿って、不服が相互行為のいかなる位置で産出されているのか、特にそのさいに不服の受け手・聞き手との連携的關係がどのように不服の話し手によって指向され、いかなる手続きでその管理がなされているのかを分析する。

データとして、動画投稿サイト YouTube での「ハーフ」「あるある」「差別」といったキーワードを組み合わせた検索を通じ、個人が MR 当事者として自らの経験を語っている動画 24 ケース (個人投稿の動画 9 件、組織・著名人投稿の動画 12 件、テレビ番組 1 件、ラジオ番組 1 件) を取得した²。会話分析には、相互行為の経過を可能な限り詳細に観察し、読者による追試に開くべく映像・音声データが重宝されてきた伝統があるが (Schegloff 2007)、近年は本稿のように、特定の人種カテゴリー (集団) や人種カテゴリーに結びついた実践に関するデータとしてオンライン上の映像を活用する試みも出てきている (e.g. Burford-Rice and Augoustinos 2018; Xie et al. 2021)。こうしたデータは、何らかの編集を被っているという意味では、会話

分析が主に扱う自然発生的相互行為とは異質かもしれない。しかし、一般オーディエンスという受け手にとって理解可能であるようにデザインされているという意味では、会話分析の方法を効果的に適用することができ (Heritage and Clayman 2002; Frobenius 2014)、幅広い聞き手への指向が人種主義的経験の語りに関連しているかに着目する本稿の視点とも適合的である。

以上のデータは、会話分析で準用される形式のトランスクリプトによってその内容を表記する。それぞれの発話に付記される記号の意味は次の通りである。「(数字)」は沈黙の秒数。「(文字)」は聞き取り困難な発話。「文字:」は直前の音の伸び。「文字」は強い発話。「文字?」は尻上がりの抑揚。「文字.」は尻下がりの抑揚。「文字,」はまだ発話が継続するように聞こえる抑揚。「=」は前後の発話の密着。「h」は息を吐く音もしくは笑い。「.h」は息を吸う音もしくは笑い。「(())」は分析者による注記。「¥」は笑っているような声の調子での発話。「↑」は直後の音の高まり。

4 分析

前章冒頭で述べたように、抽象的な観点からみれば、人種主義的経験を語るという行為は不服の一種として捉えることができる。そうであるなら、そもそも不服という行為が相互行為上でいかにして遂行されるのか、相互行為者がその遂行に際していかなる課題に指向しているのかをまずもって考慮する必要があるだろう。

この点について強調すべきは、不服は話し手が会話の中で好き勝手に始めたり終えたりできる行為ではなく、その可能性は当座の会話の連鎖組織に依存する、ということだ。具体的には、不服は、(1) 話し手が何らかの話題との関係において何らかの「不服に値する complainable」事柄—特定の誰かの不適切な振る舞いや欠陥—への言及や否定的評価・感情の表現を行う隣接対第一成分、(2) 聞き手が(1)にたいして共感、謝罪、同意、不同意、対処(の提案)、弁解といった反応によって不服の権利を肯定したり否定する隣接対第二成分、(3)(2)を踏まえての不服の詳述や撤回、という形で展開される (Drew 1998; Schegloff 2005)。こうした連鎖上で不服の話し手が直面する実践的課題は、いかに不服を開始するのか、そして開始後にいかに連携を管理しつつ不服を継続するか、という問題である (Traverso 2009)。本章では第1節で前者の問題を、第2節・第3節で後者の問題をそれぞれ検討する。

4-1 いかに不服を開始するのか

まず本節では、いかに不服を開始するのかという実践的課題がどのように達成されているのかを見ていく³。以下の断片1は、「ハーフ/ミックスが日本で感じること」と題した動画の一片である。動画は、インタビュワーの前で4人のMRが数分間にわたって自らの生活史を回顧し、その中での「ハーフ/ミックス」としての経験を時系列的に物語っていく、という形式をとっている。その一人はアフリカ系アメリカ人を父に持つ歌手のAISHA(以下、A)で、インターナショナルスクールに入学するまでの暇だった間に、母の薦めで日本の小学校に通っていた当時のことを振り返っている。

断片 1 01:51-01:58

- 01 A : ((日本の小学校に))行かしてもらって::,
02 (0.7)
03 A : ↑¥そんときにもう(.)す::↑ごい¥, いじめられ↑てえ::(.)hh
hhuhahahhhhhh (0.2) ↑いやあ::(.)大変でしたね.

出所)「ハーフ/ミックスが日本で感じること」

(2022年1月1日取得, <https://www.youtube.com/watch?v=mHWsSLbADuY>)

Aは、自分がどのような経緯で一般小学校に入学するに至ったかを説明した上で(01行)、「すごい」「いじめられ」た経験を伝え、自分にとって「大変」な経験だったと定式化している(03行)。このように不服を開始し、断片の後続する箇所でAは頭髪を級友から頻繁にいじられるという経験を報告することで不服の内容を詳述していく。

MRとしての経験の不服は、このように1人の話し手の物語に埋め込まれる形だけでなく、複数人の会話の中で別のMRに関係する話題から推移するという形でも開始されうる。以下の断片2は、ギャル系ファッションを発信するチャンネル「nuts」の「【過去写真】ハーフモデルを集めて過去を振り返ってみたら顔整い過ぎてた!!」と題した動画の一片である。動画では「nuts」モデルでMRである関口さくら(以下、S)、Mayuri(以下、M)、加藤美佳(以下、K)の順番に各自の幼少期の写真が時系列に表示され、写真が撮影された時期についての逸話とそれに対する残り2人の聞き手(映像内の参加者)の対応により会話が展開されている。

Kは、手を叩くことでそれまでの話題からの推移を示し、小学校時代に人種差別を頻繁に受けていたという経験を報告している(01-06行)。映像内の聞き手であるSとMはそれに対してそれぞれ04行と07行で相槌を打つことで、Kが不服を語る権限を認めている。

注目したいのは、話し手の属性や人数、チャンネル・活動のタイプといった形式上の差異にもかかわらず、これらの事例では、人種主義的経験の不服がいくつかの共通の手続きにより開始されているように見える、という点である。

第1に、動画のデザインによる「ハーフ」カテゴリーの発動である。たとえば断片1では「ハーフ/ミックスが日本で感じること」という、断片2では「【過去写真】ハーフモデルを集めて過去を振り返ってみたら顔整い過ぎてた!!」という題名が設定されている。この設定を通じて、動画内の話し手は一他の別の事柄ではなく—自分たちの経験について語るのであるということ、そしてその語りは「ハーフ」カテゴリーのもとでの語りであるということ、聞き手(視聴者)が理解しうるように動画がデザインされている。

第2に、動画内での参加者たち自身の実践を通じての「ハーフ」カテゴリーの発動である。たとえば断片2-1の直前の会話では、写真を交えてKの過去を振り返るなかでKが中学校に入学してから体が痩せたという経験が報告されている(11:23-)。それに対してその場にいるMが「みんな一緒」の経験をしたと応答し(11:33-)、Sも「ハーフの子って最初めっちゃムチムチなイメージ」と述べ、これにSもMも同意を表明している(11:45-)。こうしたやり取りの直後で、断片2-1のように人種差別という話題が展開され(03行以下)、同様に「ハーフ」に典型的な経験として定式化される(14-16行)。もちろん、中学に入ってから痩せるとい

断片 2-1 12:01-12:12

- 01 K: 小学校るときとかさあ:も:(K、両手を叩く))
02 ((編集による中断))
03 K: >やっ[hh ば<(.)人種差別とか]もう
04 S: [ね:ん:: ン:]
05 (0.2)
06 K: あたしされてたこと全然あったんですよ[お:: ((K、カメラに視線を向ける))
07 M: [ん: ン:
08 (0.2)
09 K: 母国帰れえ::と[か::]
10 M: [ん::][ん:]
11 S: [あ:]る::(.) ((K、Sに視線を向ける))
12 K: ある[:?]
13 S: [あ:]る: めっちゃある
14 K: (やっぱあ(る)_ ハーフあるある ((K、0.2秒程度Mに視線を向けてからカメラに視線を向ける))
15 (0.2)
16 K: って>やっぱ<h そういうのと思うんですよ:: ((K、0.2秒程度Mに視線を向けてからカメラに視線を向ける))

出所)「【過去写真】ハーフモデルを集めて過去を振り返ってみたら顔整い過ぎてた!!」

((2022年1月8日取得, <https://www.youtube.com/watch?v=Br6wsqhlJsA>)

う経験それ自体は「ハーフ」一般という観点から理解される必然性はない(たとえば、その場にいる話し手たち個々人の経験としても理解可能かもしれない)。だが、このように動画内の参与者たち自身が自分たちの経験を「ハーフ」カテゴリーで定式化し、その定式化を受け入れ合うことで、そうしたカテゴリーとの結びつきにおいて等しい水準に属する話題として人種差別的経験を位置づけること、そしてそれについての不服を開始することが可能になっている⁴。断片1についても、引用部分とその前後でAの通った学校として、日本人生徒が多いと想定される一般学校と外国人生徒が多いと想定されるインターナショナルスクールとが言及されている。そして、前者に特有の経験としていじめが言及されることで、日本人と外国人を両親にもつ「ハーフ」ならでは人種差別的経験としてAのいじめ経験が理解できるように発話がデザインされている⁵。

第3に、こうした「ハーフ」カテゴリーのもとでの不服の開始にあたっては、「ハーフ」カテゴリーが、話し手としての動画内の参与者と聞き手としての視聴者の間の認識上の非対称性に結びついている。誰かにあるカテゴリーを適用することで、その人にそのカテゴリーに一般に期待される経験や知識を語る権限、すなわち認識上の権限 epistemic authority を帰属すること、それを前提に話し手が自らの知識や経験を語ることはきわめてありふれた現象であるが(Raymond and Heritage 2006)⁶、ここでは「ハーフ」カテゴリーに結びついた経験の描写によってこうした権限が示されているように見える。たとえば、同級生から(頭髪をいじることで)いじめを受ける(断片1の03行)、学校で「母国帰れ」と言われる(断片2の09行)と

いった出来事は、話し手にとって「ハーフ」であるがゆえの望ましくない経験として理解可能かつ、「ハーフ」ではない視聴者の多くにとって直接経験しうるような出来事ではないだろうし、それは出演者たちにとっても想定可能なことであろう。このように話し手自身が直接に経験しており、聞き手が経験していない(と想定される)、かつ一般的に望ましくない出来事を語る時、話し手は一定の認識上の権限を帯びる一言い換えれば、想定される聞き手よりも自分がその出来事・経験について知っており、したがって優先的に語る事ができる・語るべきであると期待される一ことになる (Heritage 2011: 160; Sacks 1992: 2: 246)。こうした権限のもとでこそ、断片1や断片2では、「ハーフ」の話し手として、「非ハーフ」の聞き手に対して、自分たちに固有の経験を語る事が適切になる。実際、断片1のAの場合は視線をインタビュワーに向け敬語を用いることで(03行)⁷、断片2-1のKの場合は視線をカメラに向け敬語を用いることで(06行)、その場にはない映像視聴者としての聞き手に対する指向を表示しながら自らの経験を語っている (Heritage and Clayman 2002)。このようにして、「非ハーフ」としての聞き手への認識上の権限を保持しながら、話し手は不服を開始している。

第4に、不服を開始するにあたって話し手は何らかの仕方で自らの不服に対する非連携的行為としての指向を示している。すなわち「いじめ」や「人種差別」という定式化に達するまでに、「もう」(断片2-1の01・03行)や「やっぱ」(断片2-1の01・16行)といったつなぎ語が発せられたり、沈黙(断片1の02行)が生じたりすることで、自分がこれから行おうとしている不服の開始が当座の連携にとっての潜在的脅威であるという理解を示している (Pomerantz 1984)。ただしこの点については、連携が複数のタイプの聞き手との異なる仕方で連携でありうるという点に注意が必要である。断片2-1の場合、動画の外部(視聴者)という観点では「非ハーフ」の聞き手との連携が指向されているとしても、動画の内部(当座の相互行為参加者)という観点では「ハーフ」の聞き手との連携が指向されるからである。このような「ハーフ」カテゴリーのもとでの不服における連携の相手の複数性という論点は、次節にて詳論する。

以上要するに、人種主義的経験の不服は、「ハーフ」という成員カテゴリー、それに基づく「非ハーフ」の聞き手に対する認識上の権限、並びにそうした聞き手に対して不服という行為が非連携的である可能性への指向のもとで開始されているのである。

4-2 笑いとユーモア

前節で見てきたような仕方で開始される人種主義的経験の不服は、どのように展開され、その際に不服の話し手のいかなる聞き手への指向がどのように不服連鎖を形づくっているのか。本節と次節ではこの問題を検討していく。

第2章で触れたように、ケイン(2017; 2019)はMR当事者コミュニティの成員資格のいわばトークンとして笑いが使われていることを示唆していた。本節では、こうした相互行為上の資源としての笑いが一般的オーディエンスに向けた不服という行為でも活用されていることを確認したい。まず、先に開始という観点から検討した断片2の後続部分を見よう。

断片2に関して、一方では相互行為のその場に共在している「ハーフ」当事者同士の連携が、他方では画面の外部にいる視聴者である「非ハーフ」の聞き手との連携が、共同的に追

断片 2-2 12:12-12:07

- 17 (0.2)
 18 M: 超あるある. ((K、M に視線を向ける))
 19 (.)
 20 K: ある::?=
 21 M: =ちょ:あるある.
 22 (0.3)
 23 K: む¥かつくよねえ ¥:: hhh ha [ha ((K、カメラに視線を向ける))
 24 S: [hhahahaha

求されていることに注意したい。一方で K が自らの人種差別的経験を「ハーフあるある」として一般化したのを受け (14-16 行)、M は「超あるある」と応じることで K の経験に対する理解を主張する (18 行、21 行)。この理解の主張は、先行する K の発話に対してほぼ間髪入れずになされている限りで、そして同じ「ハーフ」という成員性を M が帯びているかぎり、強い連携と共感の標識として機能する (Sacks 1992: 2: 257)。また K もこの応答に対して視線を向けながら共感を確認した上で (18-20 行)、「むかつくよね」と応じることで、自分たちが「ハーフ」としての人種差別的経験とそれに対する否定的感情・評価を共有していることを主張している (23 行)。こうした手続きが合わさることで、「ハーフ」という共-成員性のもとに人種差別経験の不服が共同的に遂行され、「ハーフ」としての連携が表示されている (Grancea 2010)。

他方、以上のような「ハーフ」としての連携のもとで K 以外の話し手も「人種差別」についての不服を展開していくなら (Drew and Walker 2009)、この断片は「非ハーフ」である視聴者に何らかの居心地悪さを与えるかもしれないし (Sacks 1992: 2: 671f)、「nuts」の視聴者への訴求という活動に支障が生じるかもしれない (Edwards 2005)。そしてそうした可能性は動画内の相互行為に参与している話し手たちや動画を作成している送り手たちにとっても予期しうる可能性であるだろう。だが、こうした可能性は、いくつかの手続きで周到に制約されている。K は不服連鎖の中で「むかつく」という否定的評価・感情を表現するにあたって、その直後で笑いを発することで、自分たちの経験を不服に値すると同時に笑ってよい laughable 事柄としても扱っている (23 行)⁸。この時 K はカメラに視線を向けることで聞き手もそのように自らの経験を受け止めるよう促し (Jefferson 1979)、S も笑いで応じることで (24 行) 自らの不服連鎖を完了している。実際、この直後の部分では、M が当時との対比において今の状況が「ハーフ」として好ましいものであるかどうかという、「ハーフ」カテゴリーに関連する別の事柄へと話題が推移している⁹。このように不服連鎖が共同的に完了されることで、不服の対象である経験が深刻な問題として理解される可能性は統制され、不服において生じうるような潜在的緊張は回避されている。同様の手続きは、先に触れた断片 1 にも指摘できよう。

以上の断片 2 に関する検討では、不服が展開された後、かつ話し手自身が笑いを発している様子を分析してきた。他方、視聴者としての聞き手との連携の管理は、不服が展開される前かつ話し手がユーモアを促すことによっても遂行される。この点を確認するために断片 3 を取り上げよう。断片 3 は、アフリカ系アメリカ人を父に持つお笑い芸人のアントニー (以

断片 3 14:13-14:26

- 01 A: <他のチームの(0.4)対戦相手と戦うわけよ>, (0.6) ね. (.)↑したら::
02 (0.3)
03 A: ↓わっ:(0.5) [なんだ:
04 M: [hhuhuh
05 A: なんだ¥あの, でっかい(0.5)'黒いやつ¥ (0.2) ¥何なんだあいつはって¥.
06 A: やっぱも:(0.5) その:: (0.4) ↑それはも:毎週やっぱやだったよね.
07 (0.2)
08 M: ん::

出所)「芸能界で黒人ハーフとして活躍している経験 | 芸人のアントニーが語る! めっちゃ面白い」

(2022年1月2日取得, <https://www.youtube.com/watch?v=80jSGI7IJkc>)

下、A)が生い立ちから現在までの経歴をインタビューの形式で語る動画である。少年野球の試合の整列時に相手チームのメンバーから自分がその外見的特徴ゆえに注目をあびた様子をAが聞き手のマックス(以下、M)に説明している。

一方で、Aの経験は不服に値する事柄として理解可能であるようにデザインされている。少年野球チームでの経験を描写した直後で、「やっぱりやだった」という自身の否定的感情が表明されている(06行)。この発話順番は、彼の否定的感情が周囲からの人種主義的態度の結果として生じたものであると、受け手が理解することができるようデザインされている(Drew 1998)。実際Aが不服を発している順番においては、MはAの語りに相槌をうつことで不服の語りを真剣な態度で聞いている(06-08行)。この不服が一貫して真剣な調子で展開するなら、上の断片は「黒人(ハーフ)」としてのAの「日本人」としての視聴者への不服として聞こえるかもしれないし、不服ばかり言っている人である否定的評価を視聴者に含意するかもしれない(Edwards 2005)。実際Aは「やっぱりやだった」と述べる前に言いよどみや「その」というつなぎ語を用いることで、自らの感情表現が非優先的であるという理解を示している(06行)。

他方、断片2と同様、こうした人種差別(の不服)という可能的理解とそれをめぐる潜在的緊張は、Aの経験を笑ってよい事柄として扱うことで統制される。すなわちAは、複数の資源を用いて、対外試合で相手チームの選手が自分に対してどんな発言や振る舞いをしていたのかを具体的かつ詳細に実演している。無論実演という行為がただちに笑いの促しであるとは限らない。しかしAは、笑っているような声の調子(05行)や音階(03行)の変化を加えて再現することで、聞き手がAの当時の状況や経験に臨場感を得られるよう、ユーモアを促すように自らの発話をデザインしている。こうしたデザインにあわせMも笑いで応じることで(04行)、両者の間に連携の関係が促進されている(Haakana 2007)。そして「毎週やっぱやだった」という不服の内容の定式化は、こうした連携の管理の手続きを経てなされている。不服が展開されてから事後的かつ話し手自身が笑いを発している断片2、不服が展開される前に事前的かつ話し手がユーモアを促している断片3という形式上の相違はあれど、人種主義的経験の不服の話し手がその都度の場面に応じて笑いやユーモアを通じて連携を管理して

断片 4 03:30-03:41

- 01 M: >でもなんかそゆとこアメリカ人だよねっ(.)て<言わ(0.3)[れるとなんか_]]
02 Y: [↓え………]
03 (0.5)
04 Y: ↓あ…:
05 M: なんていう(.), 私が性格悪いだけなのかもしれ(.)いい気分はしない(0.4)
ていうか.
06 A: いや:: [しな]いです(よね.)(しない)
07 T: [ん…:]
08 Y: しないっすね…:

出所)「【U30 本音でダイアログ】「ハーフ」と呼ばれて〈前編〉見えない壁」

(2022年1月3日取得, <https://www.youtube.com/watch?v=dXDcBy7g2Pk>)

いるということを確認しておきたい。

4-3 評価の一般化可能性の統制

非連携的行為を遂行するにあたって、聞き手との連携を維持・管理するための資源として笑いやユーモアが運用されることは先行研究でも広く指摘されてきた一方 (Edwards 2005; Jefferson 1984)、本節で扱う評価の一般化可能性の統制は、これまで必ずしも十分に検討されてこなかった行為である。前節で示したように、「ハーフ」としての話し手がメディアを通じて人種主義的経験の不服を開始するにあたっては、発話時点では共在していない「非ハーフ」としての聞き手(視聴者)の存在を、そして人種的成員性の相違に基づく彼ら聞き手との認識上の非対称性を指向しているのだが、こうした認識上の勾配はそれ自体が相互行為のその都度の場面で参加者の実践的課題に応じて動的に交渉されるものであり (Heritage 2011; Heritage and Raymond 2006)、人種主義的経験の不服もその例外ではないのである。

評価の一般化可能性の統制がいかに遂行されるのかを見るために、まず断片4を検討する。この動画は、様々なバックグラウンドを持つ日本人の若者が対談する「U30」という朝日新聞社の企画の一環として投稿されたもので、「ハーフ」当事者5名が日常生活で経験している「見えない壁」について語り合うことを趣旨としている。断片4は、「外見で判断されることによって日本に住んで生きづらさを感じたエピソード」についてAが質問したことを受けて当事者の各自が自らの経験を語り始めるなか、Mが外見上の「あるある」として、自分がハンバーガーを食べているときなどに「アメリカ人」らしいと言われる経験に言及している部分である。以下、記者をA、ヤス(中国系・アジア系)をY、マリNZ(アメリカ系・白人系)をM、タニヤ(アメリカ系・黒人系)をTとそれぞれ略記する。

笑いやユーモアがそうであったように(第4章第2節)、ここでも不服連鎖は不服に値する出来事への言及から不服の内容としての否定的評価・感情の表明に直結するというような単線の構造をとらない。Mは、「なんか」というつなぎ語や比較的長い沈黙によって(01行)、また「なんていう」(05行)という言葉探しの標識によって「いい気分はしない」の直前で言いよんでいる。このような言いよどみによってMは、前節までの事例と同様不服連鎖を構成する負の感情表現を非連携的・非優先的発話として指向していることを示している

(Pomerantz 1984)。

このとき M が非優先性・非連携性を指向しつつそれを管理するために、第 1 に「私が性格悪いだけなのかも」という性格面の自己卑下を前置きとして、第 2 に「というか」というヘッジを付加要素としてそれぞれ用いていることに注目しよう (05 行)。前節では笑いが配置されていた位置でなぜこれらの表現が配置され、不服が迂遠な仕方で表明されているのだろうか。第 1 の自己卑下については、一般に何らかの不服に値する事柄に対する反応としては他者に帰責する行為 (不服や非難) よりも自己に帰責する行為 (謝罪や受け入れ) の方が参与者間の連携に貢献するという意味で優先的であるとされる (Pomerantz 1978)。実際、「アメリカ人」扱いされることに「いい気分はしない」という否定的評価だけが与えられるなら、M の人種の経験は専ら「非ハーフ」の他人に帰責されているように視聴者には聞こえるかもしれないし、「ハーフ」ではあっても「アメリカ系ハーフ」ではないその場の聞き手にとっては共感困難な経験として聞こえるかもしれない。そしてそれは一般的視聴者に向けられ、非ハーフの記者 A、アメリカ系ではない「ハーフ」を聞き手とする発話を行う M にとって想定可能なことであろう。その代わりに「私が性格悪いだけなのかも」という性格面の自己卑下を行うことで、自らの評価・感情が「(アメリカ系) ハーフ」として必ずしも一般化しうるものではないという理解、そのように感じる性格を備えた自分自身にも問題があるという理解を示している。これによって M は、自らの経験が聞き手によって「(アメリカ系) ハーフ」として一般化される可能性を統制し、自らの不服が含意しうる (自らの人種の経験についての) 他者への帰責を緩和している。

こうした不服連鎖内の評価が一般化される可能性の統制とそれによる他者への帰責の緩和をさらに補強するのが、「というか」というヘッジである (05 行)。もちろん前節までの事例で見てきたように、不服の内容としての負の感情表現だけでこの発話を M が終えることは可能ではある。しかしこのとき「というか」を付加することで、M は自らの不服の内容が完了したことを示しつつも、その内容に対する自分の判断が必ずしも十全に根拠づけられていないことを示している。不服の話し手が聞き手との連携を維持・追求するために「というか I mean」を発することを Maynard(2013) は指摘しているが、ここでも M が聞き手の出方に応じて、連携的反応を引き出すように自らの不服表現を緻密にデザインしていることが伺える。実際、以上のような手続きをふまえて表現された M の不服に応答するにあたって、A や Y は、M の感情表現 (05 行の「いい気分はしない」という表現) を部分的に反復することによって (06・08 行)、M の立場への強い同意と連携を表示している (Pomerantz 1984: 66f)。このように M の体験についての参与者間の経験の共有が成立したことが聞き手の応答により表示・確認されることで、不服連鎖が完了可能になっている。

以上検討してきた断片 4 の場合は性格面の自己卑下やヘッジを通じて不服における評価の一般化可能性が統制されていた。他方、評価の一般化可能性の統制は、別の仕方、具体的には境遇・意識面での自己の特徴づけによっても行なわれうる。このことを確認するため、もう一つの断片を検討したい。以下に扱うのは、タレント・作家の乙武洋匡 (以下、O) が運営するチャンネル「乙武洋匡の情熱教室」に 2020 年 6 月 9 日に投稿された「【日本には人種差

断片 5 4:17-4:38

- 01 O: 具体的に(.)どういうところで, (0.4)日本にも人種差別は(0.3)あるんじゃないかっ
て感じる:?
- 02 (0.5)
- 03 Y: .hh そうですね..hhh まあその:_
- 04 (0.2)
- 05 Y: 僕もやっぱりこう父親が日本人ですしい::, 正直 6 歳の時から日本に住んでるの
で::,
- 06 (1)
- 07 Y: やっぱこうマインドも日本人ってあるところから:, (0.4) 余計, さらに: 赤裸々に
見えちゃうところがあるのもあるんすけどお::,

出所)【日本には人種差別ってないの?】矢野デイビットさんに乙武が聞く!

(2022 年 1 月 3 日取得, https://www.youtube.com/watch?v=CRZE1_xgFWg)

別ってないの?】矢野デイビットさんに乙武が聞く!」という題名の動画である。この動画は、Black Lives Matter 運動の世界的高揚を踏まえて、日本社会で人種差別があるのかについてホストの乙武がゲストでガーナ人を母にもつタレント・ミュージシャンの矢野デイビット(以下、Y)に尋ねる、という構図をとっている。断片 5 は、O が Y にどんな場面で人種差別を感じているのかについて質問している場面である。

断片 5 の後続する箇所では、賃貸物件を利用するさいに Y が経験してきた人種差別的経験が語られていく。Y は、断片 4 と同様、頻繁な言いよどみや沈黙によって (03 行)、自らの人種主義的経験の語りを非優先的・非連携的行為として指向していることを示している。しかし、この指向のもとに Y が聞き手との連携を管理しているのかを検討すると、断片 4 とは異なる仕方で、Y は自らが後続する箇所で行おうとしている評価の一般化可能性を前もって統制しようとしているように見える。

一方で、動画の冒頭では Y は「日本人のお父さんとガーナ人のお母さんの間に生まれたハーフ」として (00:21)、「6 歳の時までガーナで生まれ育って 6 歳から日本で育った」者として (00:42)、そして「ガーナの教育を中心とした支援活動を行う」者として (1:01)、O によって紹介されている。その上で O は、Black Lives Matter 運動がアメリカで高揚している一方で日本では「対岸の火事」として扱われがちであるという現状に言及し、「障害者ではあるけれども人種的には日本人である」自分よりもこの話題について優先的に語るべき人物として、Y に言及している (03:15)。そしてこの延長において、断片 5 とそれに後続する箇所で、日本における人種差別についての質問がなされていく。このように日本における人種差別という話題のもとで、人種的「日本人」との対比において発話の機会が与えられている限りでは、Y の発話は「黒人」「ガーナ系ハーフ」「ハーフ」など、様々なカテゴリーのもとで理解可能であるだろう。こうした成員カテゴリーに連動した認識上の権限の帰属は、断片 4 や断片 1 にも共通している (第 4 章第 1 節)。

他方で、Y に特徴的なのは、O の質問に応答するにあたって自らに帰属された成員性の中に一定の区分を設けることで (Nishizaka 2021)、自らの不服に含まれる評価がその人種の成員

性のもとで一般化される可能性を統制している点だ。すなわち Y は、質問に率直に応答する代わりに、父が日本人であること、自分が幼少期から日本で育っていること、日本人としての「マインド」があるという点で「余計赤裸々」に差別が感じられると前置きをした上で (05-09 行)、断片 5 の後続部分で自らの人種差別的経験を詳細に描写している。このように自らの個人的境遇を詳述する前置きを入れることで、Y は後続する不服の内容を「黒人」や「(ガーナ系) ハーフ」といったカテゴリー一般に通じる経験としてではなく、むしろ生い立ちや意識の面で「日本人」らしさを備えている一部の「ハーフ」の経験や感情として聞くように聞き手に促している¹⁰。

無論、直前で O が行なっているのは日本に人種差別があると感じる根拠についての質問なのであるから (01 行)、Y は間髪入れずにその質問に応答する—すなわち人種差別的経験の内実を詳述することで不服を展開する—こともできるはずだ。しかし、そうした直接的で流暢な応答は、「黒人」「ガーナ系ハーフ」「ハーフ」としての「日本人」への不服として一般化される形で O や視聴者といった聞き手には聞かれるかもしれない。そしてそのように聞かれるならば、「日本人」への非難として Y の不服は理解され、聞き手との連携への脅威を喚起するかもしれない。こうした相互行為的文脈のもとで、このように成員カテゴリーにもとづいて評価が一般化される可能性を統制することで、「日本人」への非難という不服の可能的な含意が統制されることになるのである。

このように、人種的経験についての不服を語る話し手は、不服連鎖内の評価を行うに際してヘッジの使用や性格面での自己の特徴づけ (断片 4)、境遇・意識面での自己の特徴づけ (断片 5) を行い、聞き手 (としての視聴者や共在者) が指向しているあるいは指向しうる人種カテゴリーのもとに評価が一般化される可能性を統制することがある。そうすることで、不服の対象である自分の人種的経験をめぐる責任の勾配を調整し、聞き手との連携を管理・追求しているのである。

5 おわりに

本稿は MR 研究に定位しつつ、当事者が自ら人種的経験を語るという実践自体がいかにか達成されているのかという問いに取り組むべく、MR が自らの人種主義的経験を語っている相互行為場面を会話分析の視点から検討してきた。検討を通じて、明らかになったのは、MR としての話し手が非 MR としての聞き手に自らの人種主義的経験について不服をいうという行為にはあるジレンマが内包されている、ということである。

一方で、MR としての話し手が、非 MR としての聞き手に向けて自らの人種的経験の不服を語る時、聞き手がそのカテゴリーに属さない (と想定される) 限り、話し手は一定の認識上の権限ないし優位性—自分は MR であるからこそ当該の負の経験をしているという意味での—を前提にしなければならない。こうした認識上の勾配があるからこそ、そして認識上の均衡を達成するという実践的課題が参与者の間で共有されているからこそ、非 MR に対して彼らでは知り得ないであろう人種的経験について MR として不服を言うことは適切になっているし、聞き手も一非 MR としてアクセス困難な、それゆえ聞くに値する経験として—それ

を聞くことができる (Heritage 2011)。本稿で分析してきた事例では、参加者はこうした聞き手—それは動画の視聴者でもあれば (断片 1・2)、動画内の相互行為場面において共在している相手と視聴者の両方であることもあるだろう (断片 3・4・5)—に対する認識上の関係や課題への指向を示しつつ相互行為に参加し、不服を開始していた (4章 1節)¹¹。

他方で、MR としての不服の話し手にとってこうした認識上の非対称性はそれ自身が問題の源泉でもありうる。その場で行なわれている不服が非 MR による MR に対する言動についての不服であるかぎり、そして聞き手が非 MR として不服を聞くかぎり、それは MR による非 MR への非難・帰責としても聞こえるからである (Grancea 2010; Whitehead 2013)¹²。あるいは、不服を追求するなら、それは不服に固執するような性向を有する者としてそれ自体負の評価に晒されるからである (Edwards 2005; Sacks 1992)。要するに、MR の話し手による非 MR の聞き手を伴う不服は、他人への責任帰属や自己の社会成員としての欠陥を含意し、話し手と聞き手との連携を損壊しかねないという意味で、相互行為上の潜在的脅威でもある。そして聞き手が何らかの形で連携する可能性があって初めてそもそも自分の経験を共有する以上、不服の話し手はまさに不服を成し遂げるためにそうした潜在的緊張を管理するという実践的課題に指向することになる。そこで連携に対する潜在的脅威としての不服を管理するために、他者への帰責・非難を統制するために、笑い・ユーモアと評価の一般化可能性の統制といった手続きを使用している、ということの本稿は明らかにしてきた (4章 2・3節)。

不服は、個人が自らの経験を公共的問題として表現する基本的手続きであるという限りで重要な社会学的論題であるが (Emerson & Messinger 1977)、人種主義的経験の不服という行為はこのようなきわめて繊細な相互行為上の規範構造によって組織されている。MR が経験を語るという実践を先行研究が十分に検討してこなかったことは前述したが、一般的オーディエンスに向けられた相互行為上での規範によってその実践がいかに編成されているのかを明らかにした点に本稿の第 1 の社会学的意義があるといえよう。人種的マイノリティ研究において会話分析の視点はあまり参照されてこなかったが、本稿の知見は、経験の語りや共有そのものを社会学的トピックとして分析するその視点 (Heritage 2011; Sacks 1992) がマイノリティへの社会学的接近法として有望でありうることを示唆している。

また本稿は、会話分析に対しても一定の経験的貢献を果たしている。近年、人種のマジョリティの間での人種差別をめぐる相互行為に焦点を当ててきた会話分析的研究が発展している。主要な知見として、当座の会話相手による人種差別的発言を聞いた聞き手は、人種差別を不当な行為として非難すべきであるという規範と、相手を明示的に非難するような非連携的行為は差し控えるべきであるという規範の間のジレンマに直面するという様子が明らかにされつつある (Robles 2015; Stokoe 2015; Whitehead 2015)。また自らの過去における人種差別的経験を回顧する人種のマイノリティの話し手も、明示的非難を自制することが報告されている (Rawls and Duck 2020; Xie et al. 2021)。こうした研究動向は、主にアングロサクソン諸国で発展しつつあるが、依然として萌芽的な段階にあり、人種をめぐる歴史や環境を異にする国や地域へと研究を発展させていくことが求められている。本稿は、日本における MR が

人種主義的経験についての不服を表現するにあたっていかに非 MR としての聞き手との連携を管理しようとしているのかを明らかにすることで、以上の先行研究の知見が社会的文脈を大きく異にする国における人種的マイノリティにも通じる可能性を示唆している。

今後の課題としては、第 1 に、日本語圏におけるより多様な相互行為的文脈に着目することである。本稿はソーシャルメディア上の動画における過去の人種主義的経験の不服に照準してきたが、異なる形式的条件に即した分析からは、異なる知見が導かれるかもしれない。先に触れたアングロサクソン諸国における会話分析的研究では、ラジオ番組や日常会話など、多様な場面が分析されてきた。こうした知見が、日本という一人種・エスニック集団の歴史や関係、人種差別をめぐる社会規範のあり方といった点で非常に異質な一社会における相互行為にも通じるのかどうかを検討することが重要であろう。第 2 に、より幅広い人種的文化的アイデンティティに着目すること、およびそれらに関する先行研究との関係を探ることである。たとえば、国内のマイノリティ研究では、在日外国人や部落民や先住民族といった背景を持つ人々が差別的経験を語るという行為をいかに観察・記述しようかという方法論的問題が繰り返し議論されてきた (e.g. 岸 2018; 岸・桜井 2012; 倉石 2007; 李 2008)。MR 以外のマイノリティが参与する相互行為にも本稿の知見が応用可能であるのか、そしてそれが先行研究の知見との間にいかなる関係・異同があるのかを精査することで、本稿の分析を一層深化させようだろう。最後に、本稿では、他者への帰責・非難を統制するための手続きとして、笑い・ユーモアと評価の一般化可能性の統制があることを明らかにしたが、両者の関係については十分に検討できなかった。今後は、会話分析の知見をより幅広く参照することで、あるいはデータを拡張することで、これらの手続きが人種・エスニックマイノリティの実践においていかなる位置関係にあるのかを探究していく必要がある。

注

- 1 たとえば、第一成分としての「依頼」に対しては、「承諾」が優先的・「辞退」が非優先的第二成分としてそれぞれ産出される。ただし、「質問」と「応答」のように、隣接対には必ずしも優先的・非優先的第二成分を含まないケースも含まれる。
- 2 個人ユーザーによるソーシャル・メディア上の投稿をデータとして無断で掲載することには、倫理的な問題が生じる。そこで、内容面で適切なコンテンツのなかでも、先行研究を参考に (Frobenius 2014)、次のような手続きをとった。個人ユーザーの投稿は、映像内容の分析という条件で投稿者の許可を依頼し、許可を取得できたものに分析を限定した。著名人やメディア組織の投稿は公共的コンテンツとして許可を得ずに取得した。
- 3 以下では動画のデザインがいかに不服の開始に関連しているのかについても分析するが、この点について若干の断りを入れておく。そもそも日常会話の中で経験を語るという行為は、それ自体、様々な手続きを通じて・局所的な場面に合わせて多様な仕方で行われる (Sacks 1992)。そして動画の場合は、動画内の参与者たち自身が動画によって放映されることを顧慮しており、投稿者も (タイトルなどを通じて) 相互行為の様子を受け手に向けてデザインしているという特殊な事情がある (Frobenius 2014)。こうした意味で、本研究が扱う不服連鎖は自然に生じた日常会話とは異なる環境で生じているという点を、本稿のデータ上の特性かつ限界として留意する必要がある。
- 4 Sacks によれば会話における話題の発展の仕方は「一歩ずつの話題推移 stepwise topic transition」という基本的仕組みによって理解することができる。すなわち、直前の発話の中で何らかの話題に包含される事柄が含まれていることが理解可能なら、現在の話し手は直後の発話の中でその話題に包含

される別の事柄に言及することで話題を展開することができる (Sacks 1992: 1: 757)。これは日常会話で一般的に観察される仕組みだが、たとえば本稿の扱う断片 2 では、「ハーフの経験」という話題に包含される事柄として「中学生になると痩せやすい体質」「人種差別を受ける傾向」が言及されているといえる。

- 5 断片 1 の直後ではインターナショナルスクールに転校してからは差別がなくなったという A の語りを展開されている。
- 6 自他の有する、もしくは規範的に有すると期待されている知識や経験の配分、およびその非対称性への指向が相互行為を形づくっている仕方については、会話分析の重要なトピックとして研究が蓄積されてきた (Sacks 1992; Heritage 2011; Heritage and Raymond 2005; Raymond and Heritage 2006)。
- 7 なお断片 1 の動画のチャンネル情報を参照するかぎり、断片 1 のインタビュワーは日本出身の日本人であり、MR ではない人物であると見受けられる (2022 年 1 月 4 日取得, <https://www.youtube.com/c/FindYourLoveinJapan/about>)。
- 8 Jefferson(1984) はこのように不服に付帯する笑いによって、不服の対象がそれほど重大ではないことが含意され、聞き手との連携が補強されることを示唆している。また Robles(2015) も、差別的な発言をした相手への非難を行うさいに話し手が笑いを発することで連携を管理しようとしている相互行為場面を分析している。
- 9 参加者の共同的笑いは話題の転換の標識として機能しうる (Holt 2010)。
- 10 Stokoe(2009) は、不服連鎖を含む相互行為において参加者たちがこのように一方で自他のカテゴリー化、他方で自他の個人的境遇の記述を通じて不服を遂行している様子を明らかにしている。これは本節の分析と重なる知見である。
- 11 もちろん、断片 2-2 の分析において示したように、MR としての話し手が非 MR としての聞き手だけでなく同じ MR としての聞き手に向けて自らの人種の経験についての不服を語る場面も当然ありうる。本稿では集中的に分析することができなかったが、こうした場面における不服連鎖がいかに別様に組織されているのか、それとケイン (2017) のような当事者コミュニティにおける経験の語りとの間にいかなる異同があるのかといった点は、今後の重要な研究課題として留意すべきである。
- 12 Sacks は、成員カテゴリーの一般的特徴として、あるカテゴリーの成員として振る舞う参加者はそのカテゴリーの代表として理解されると指摘している (1992: 1: 41)。本稿に即していえば、ある話し手が「ハーフ」として経験を語るという行為において彼女ないし彼が「ハーフ」として一般化される可能性を指向し、その可能性を統制する方法を明らかにしたのが本稿の分析だと言えるかもしれない。

文献

- Bobo, L. D. and C. Fox, 2003, "Race, Racism, and Discrimination: Bridging Problems, Methods, and Theory in Social Psychological Research," *Social Psychology Quarterly*, 66(4): 319–32.
- Burford-Rice, R. and M. Augoustinos, 2018, " 'I Didn't Mean That: It Was Just a Slip of the Tongue': Racial Slips and Gaffes in the Public Arena," *British Journal of Social Psychology*, 57(1): 21–42.
- Clayman, S. and J. Heritage, 2002, *The News Interview: Journalists and Public Figures on the Air*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Dersley, I. and A. Wootton, 2000, "Complaint Sequences within Antagonistic Argument," *Research on Language and Social Interaction*, 33(4): 375–406.
- Drew, P., 1998, "Complaints About Transgressions and Misconduct," *Research on Language & Social Interaction*, 31(3–4): 295–325.

- Drew, P. and T. Walker, 2009, “Going Too Far: Complaining, Escalating and Disaffiliation,” *Journal of Pragmatics*, 41(12): 2400–2414.
- Edwards, D., 2005, “Moaning, Whinging and Laughing: The Subjective Side of Complaints,” *Discourse Studies*, 7(1): 5–29.
- Emerson, R. M. and S. L. Messinger, 1977, “The Micro-Politics of Trouble,” *Social Problems*, 25(2): 121–34.
- Frobenius, M., 2014, ““Audience Design in Monologues: How Vloggers Involve Their Viewers,”” *Journal of Pragmatics*, 72: 59–72.
- Grancea, L., 2010, “Ethnic Solidarity as Interactional Accomplishment: An Analysis of Interethnic Complaints in Romanian and Hungarian Focus Groups,” *Discourse and Society*, 21(2): 161–88.
- Haakana, M., 2007, “Reported Thought in Complaint Stories,” E. Holt and R. Clift eds., *Reporting Talk: Reported Speech in Interaction*, Cambridge: Cambridge University Press, 150–178
- Heinemann, T. and V. Traverso, 2009, “Complaining in Interaction,” *Journal of Pragmatics*, 41(12): 2381–84.
- Heritage, J., 1984, *Garfinkel and Ethnomethodology*, Cambridge: Polity.
- , 2011. “Territories of Knowledge, Territories of Experience: Empathic Moments in Interaction.” T. Stivers, L. Mondada, and J. Steensig eds., *The Morality of Knowledge in Conversation*, Cambridge: Cambridge University Press, 159–183.
- Heritage, J and G. Raymond, 2005, “The Terms of Agreement: Indexing Epistemic Authority and Subordination in Talk-in-Interaction,” *Social Psychology Quarterly*, 68(1): 15–38.
- Holt, E., 2010, “The Last Laugh: Shared Laughter and Topic Termination,” *Journal of Pragmatics*, 42(6): 1513–25.
- 岩淵功一編, 2014, 『「ハーフ」とは誰か——人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社.
- Jefferson, G., 1979, “A Technique for Inviting Laughter and Its Subsequent Acceptance/Declination,” G. Psathas eds., *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, New York: Irvington Publishers, 79–96.
- , 1984, “On the Organization of Laughter in Talk about Troubles,” J. M. Atkinson and J. Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 346-369.
- Jones, N., R. Marks, R. Ramirez, and M. Ríos-Vargas, 2021, “2020 Census Illuminates Racial and Ethnic Composition of the Country,” (2022年1月3日取得, <https://www.census.gov/library/stories/2021/08/improved-race-ethnicity-measures-revealunited-states-population-much-more-multiracial.html>).
- 岸衛・桜井厚, 2012, 『差別の境界をゆく——生活世界のエスノグラフィー』せりか書房.
- 岸政彦, 2018, 『マンガーと手榴弾——生活史の理論』勁草書房.
- ケイン樹里安, 2017, 「「ハーフ」の技芸と社会的身体——SNSを介した「出会い」の場を事例に」『年報カルチュラルスタディーズ』5: 163–84.

- , 2019, 「日中ハーフ」とメディアの権力——「日中ハーフあるある」動画の多義性」『新社会学研究』4: 180–202.
- 是川夕, 2018, 「日本における国際人口移動転換と其中長期的展望——日本特殊論を超えて」『移民政策研究』10: 13–28.
- 倉石一郎, 2007, 『差別と日常の経験社会学——解読する「私」の研究誌』生活書院.
- 李洪章, 2016, 『在日朝鮮人という民族経験——個人に立脚した共同性の再考へ』生活書院.
- Maynard, D., 2013, “Defensive Mechanisms: I-Mean-Prefaced Utterances in Complaint and Other Conversational Sequences,” M. Hayashi, G. Raymond, and J. Sidnell eds., *Conversational Repair and Human Understanding*, Cambridge: Cambridge University Press, 198–233.
- Nishizaka, A., 2021, “Partitioning a Population in Agreement and Disagreement,” *Journal of Pragmatics*, 172: 225–38.
- 野入直美, 2022, 『沖縄のアメラジアン——移動と「ダブル」の社会学的研究』ミネルヴァ書房.
- Osanami S. T., 2018, “Ethnic Options, Covering and Passing: Multiracial and Multiethnic Identities in Japan.” *Asian Journal of Social Science*, 46(6): 748–73.
- Osanami S. T. and Y. Sato, 2021, “Beyond Being Either-or: Identification of Multiracial and Multiethnic Japanese,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 47(4): 802–20.
- Pomerantz, A., 1978, “Attributions of Responsibility: Blamings,” *Sociology*, 12(1): 115–21.
- , 1984, “Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes.” J. M. Atkinson and J. Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 57–101.
- Rawls, A. W. and W. Duck, 2020, *Tacit Racism*, Chicago: University of Chicago Press.
- Raymond, G. and J. Heritage, 2006, “The Epistemics of Social Relations: Owing Grandchildren,” *Language in Society*, 35(5): 677–705.
- Robles, J. S., 2015, “Extreme Case (Re)Formulation as a Practice for Making Hearably Racist Talk Repairable,” *Journal of Language and Social Psychology*, 34(4): 390–409.
- Sacks, H., 1992, *Lectures on Conversation*, 2 vols., Oxford, UK: Blackwell.
- Schegloff, E., 2005, “On Complainability,” *Social Problems*, 52(4): 449–76.
- , 2007. *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stokoe, E., 2009, “Doing Actions with Identity Categories: Complaints and Denials in Neighbor Disputes,” *Text and Talk*, 29(1): 75–97.
- , 2015, “Identifying and Responding to Possible -isms in Institutional Encounters: Alignment, Impartiality, and the Implications for Communication Training,” *Journal of Language and Social Psychology*, 34(4): 427–45.
- Traverso, V., 2009, “The Dilemmas of Third-Party Complaints in Conversation between Friends,” *Journal of Pragmatics*, 41(12): 2385–99.
- 下地ローレンス吉孝, 2018, 『「混血」と「日本人」——ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』

青土社.

Whitehead, K., 2013, “Managing Self/Other Relations in Complaint Sequences: The Use of Self-Deprecating and Affiliative Racial Categorizations,” *Research on Language and Social Interaction*, 46(2): 186–203.

———, 2015, “Everyday Antiracism in Action: Preference Organization in Responses to Racism,” *Journal of Language and Social Psychology*, 34(4): 374–89.

Xie, Yarong, S. Kirkwood, E. Laurier, and S. Widdicombe, 2021, “Racism and Misrecognition,” *British Journal of Social Psychology*, 60(4): 1177–95.

(あるが ゆうあにーす、東京大学大学院学際情報学府、yaarugannw@gmail.com)

(査読者 明戸隆浩、岡沢亮)

Sharing Experiences of Racism in Interaction: How Multiracial Participants Manage Affiliation in Complaint Sequences

ARUGA, Yu-Anis

While multiracial people’s identities and experiences are increasingly prominent issues in Japan, it remains unclear how multiracial people share their experiences of racism in interaction. Drawing on a conversation analytical approach, this paper analyzes the ways in which multiracial interactants complain about their possibly racist experiences. It is demonstrated that to affiliate with non-multiracial hearers, multiracial speakers seek to manage complaining as a potential threat to the affiliation through interactional resources, such as humor and laughter, and constraints on the generalizability of assessment. These findings suggest that complaining about experiences of possible racism is contingent on local and sequential order of interaction.